

〔「花の美術」展によせて〕

高麗時代に好まれた花—黄蜀葵—

高麗時代の螺鈿作品にあらわされる植物文様は種類が限られ、菊唐草文が圧倒的に多く、次に牡丹唐草文が挙げられます。これらの他には、水辺の植物と水禽文との組み合わせとして柳などがわずかに見られるくらいで、水辺の情景があらわされた図案は金属工芸や陶磁器にも認められます。文様の種類が限られる理由の一つには、現存する螺鈿の作例はほとんどが経箱や念珠箱といった仏教における用途を持ち、限られた場で製作されているためと考えられます。

これに対して、より広い用途をもって数多く製作された陶磁器や金工作品では、文様の幅も広く、植物の種類も増えます。これらには、蓮や牡丹など唐草文と結びついて東洋で広く用いられた植物の他に、高潔な人格が重ね合わされた松や竹、梅が多くあらわされています。また、長寿など吉祥の意味を持つ桃や灵芝、瓜、瓢箪が認められます。これらは東アジアにおいて受け継がれてきた伝統的な文様で、中国や日本の絵画や工芸にもあらわされていますが、高麗時代の工芸品にはその他に、薄、蘆、柳などがよく取り上げられ、植物のそばで遊ぶ鳥たちとともに、水辺の情景としてあらわされています。このような情

景にはまた舟に乗り、釣りをする人物など、自然とともにある人々の営みも描き込まれています。日常に目にすることができる身近な自然の情景は、器物の文様として積極的に取り入れられたといえます。

「銅製銀象嵌柳水禽文浄瓶」(図1~4、大和文華館)にも、胴部全面に植物と水禽文があらわされています。枝垂れ柳と梅樹、黄蜀葵(トロアオイ)、山躑躅(ヤマツツジ)、野菊と見られる植物がそれぞれ四方にやや大きく配され、上空には飛翔する鶴がやや小さくあらわされ、下方では鴛鴦が悠々と羽根を広げ、毛繕いをしています。胴裾には、ぐりりと一巡するように波線が引かれて水流があらわされます。これらの景色を一続きに見ると、植物の季節はそれぞれ冬から春、夏、春、秋となり、季節の移り変わりを眺めることができます。

柳・梅樹と鳥の組み合わせ(図1)のように樹木と鳥の組み合わせは中国絵画に見られる花鳥画の構図に見られます。高麗時代の陶磁器や金属器には竹・梅樹と鳥、柳と鳥の組み合わせもあり、時代が下るとともに図像が形式化する傾向が認められます。高麗時代末の14世紀半ばから後半にかけては、碗の見込みに象嵌や印花・象嵌の技法

によって柳と水鳥を交互に配し、器形に沿って円形に一巡させる図像が定型化していきます。

浄瓶の胴部背面(図2)にあらわされた黄蜀葵は中国原産のアオイ科の植物で、夏に白~淡黄色の花をつけます(図5)。葉が掌のように複数に裂けた特徴ある形状をしており、同じく中国を原産とするアオイ科の蜀葵(タチアオイ)の丸みを帯びた葉の形と区別されます。浄瓶に銀象嵌で施された文様には、黄蜀葵の特徴がよく表現されています。蜀葵は中国で「戎葵」とも呼ばれ、漢時代には既に成立していた字書である『爾雅』にも載せられています。夏に花が咲き、観賞用の花卉として古くから知られます。中国・南宋時代の「蜀葵遊猫図」(重要文化財、大和文華館)には長寿を意味する猫や蝶とともに、蜀葵が赤い花をつけて描かれています。しかし、高麗時代の作品には蜀葵はほとんど見られません。

一方で、黄蜀葵があらわされた高麗時代の作例には、前述の浄瓶の他に、直立する花卉とその下に鳥を配する花鳥の構成によって、蓮華とともにあらわされた「青磁陽刻蓮池水禽文梅瓶」(12世紀、米・フイデルフィア美術館)があり、また「青磁印花文碗」(図6、12世紀、高麗美術館)では、碗の見込み一面に唐草状にあらわされた花が、鋭く裂けた葉の形から黄蜀葵と見られます。

さらに、朝鮮王朝時代に入ると、「花卉草虫図」(図7、16~17世紀、高麗美術館)において、鶏頭や鳳仙花など秋の花と一緒に、黄蜀葵が淡い黄色の花弁が白く縁取られて描かれています。

蜀葵は赤や黄、白など華やかな色の花もありますが、黄蜀葵の花の白く清楚な色合いや佇まいが好まれたのでしょうか。金工だけではなく青磁や絵画とジャンルを問わずに文様や画題として描かれ、朝鮮半島では黄蜀葵が観賞の花卉として広まっていたことがうかがえます。作品にあらわされた黄蜀葵は、葉や花の形に特徴を捉えた写実的な表現が認められ、高麗時代の人々の花を愛でる視線が感じられます。

(瀧朝子)

※本展には展示されませんが、参考図版として図6・7を『高麗美術館蔵品図録』財団法人高麗美術館、2003年より複写させていただきました。

図 6



図 7



図 1 柳・梅



図 2 黄蜀葵



図 3 山躑躅



図 4 野菊



図 5



季刊 美のたより No.197

平成29年 1月 6日

発行 大和文華館